昼休みワークショップ
「ポスト・コロナの西洋史研究：リモート、デジタル、コスト」

1. 全体要旨

2020 年初頭から世界を揺るがした新型コロナウィルス感染症の流行以降、私たちの研究教育活動のあり方は大きな変化を余儀なくされている。一つ目の課題は人の移動の制限であり、諸外国での史資料調査・学会参加・留学を必要とする西洋史研究に与えた影響は計り知れない。今後も、別の感染症等の流行により再び同じような事態に陥る可能性は否定できず、さらに不安定な国際情勢も人の移動を制約する要因として浮上してきており、西洋史研究者にとって大きな不安材料が残されたままとなっている。

二つ目の課題は、諸外国、とりわけ欧米諸国への渡航費・滞在費の高騰である。世界規模での物価高騰と円安の影響から、諸外国での調査や研究報告にかかるコストは増加の一途を辿っており、研究に必要な史資料の入手や、現地での研究報告を通した研究成果の国際発信、人的ネットワークの構築などが困難となりつつある。

こうした課題への対応策として注目されているのが、さまざまな形のデジタル技術である。例えば、コロナ禍での学会・研究会活動のオンライン化は、これまで参加することの難しかったイベントへの参加を可能とし、移動にかかるコストを著しく低下させた。また、コロナ禍以前から進んでいた史資料のデジタル化は、物流が滞り図書館の利用が困難な中でも、史資料の入手・参照を可能とした。いまや、最新の研究論文や入手不可能な古い出版物、そして一次史料までもが、電子媒体という形で、かつては考えられないほどの規模で入手できるようになっている。

一方で、デジタル技術が万能の解決策たり得ないことも明らかである。リモート学会・研究会は従来の対面形式でのやり方を完全に代替するものではなく、対面でのコミュニケーションやネットワーキングの重要さを再認識させたし、ハイブリッド（対面とオンラインの併用）によるイベントの実施は主催者の大きな負担となっている。史資料のデジタル化については、電子ジャーナル購読料の高騰が多くの研究機関で問題になっており、そもそも多くの大学では西洋史を含む人文科学に優先順位が与えられているとは言いがたい。また、海外の大手学術出版社の一部は、学術雑誌のみならず研究書についても、紙媒体の販売より研究機関との包括契約による電子版の提供へと主軸を移しつつあるようだ。デジタル化された学術情報へのアクセスは、研究者に平等に開かれているわけではないのである。

こうした現状の課題を踏まえたうえで、今後、西洋史研究はどのように進められるのだろうか。一つの方法として、文教予算・科学技術予算の拡充を求めるという正攻法があるが、その達成には多くの困難と時間を必要とする。今この瞬間にも、研究を進めたいと考えている研究者たちは、この状況にどう対応したらよいのだろうか。本ワークショップでは、まず２人の研究者から、それぞれの研究の進め方の実践、問題の捉え方、将来の展望

について話題提供してもらい、議論することで、現在とこれからの西洋史研究のあり方を考える機会としたい。

2. プログラム

12:45-13:45

趣旨説明・司会　髙橋亮介（東京都立大学）
話題提供者 1　　小風尚樹（千葉大学）【Online】
話題提供者 2　　原田晶子（川村学園女子大学）